九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鮑照「蕪城賦」編年考

土屋, 聡
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 助手 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/3632

出版情報：文學研究. 104, pp.63-87, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

鮑照「蕪城賦」編年考

土屋　聡

一　「蕪城賦」の編年に関する従来の研究

盛者必衰、おごれるものは久しからず。一読、そのような感想を抱かしめる「蕪城賦」[1]は、全文僅か四百五字の短篇ながら、栄枯盛衰のあまりにも大きな落差を鮮やかに描いた辞賦であり、鮑照（南朝宋・四一四？～四六六）の文学を代表する珠玉の名品である。また、本作は、謝朓や呉均ら六朝後期の文豪もつとに読んでいたらしく、斉梁という鮑照からさほど遠くない時期には流布していたことが確認される[2]。

本作の成立背景については、序文やその他の記録も無いため、はっきりしたところは判っていない。ただ、『文選』李善注に「集に云く、広陵故城に登る（集云、登廣陵故城）」とあり、この悲運の都市が広陵（江蘇省揚州市）を指すという点だけは、諸家の見解は一致している。一方、その制作年代については、諸説紛々として未だ定説を見ない。

今、従来の代表的な説を列挙するならば、次の通りである[3]。

Ⅰ　大明六年（四六二）説……『文選』五臣注。

Ⅱ　大明三年（四五九）説……何焯『義門読書記』・銭仲聯『鮑参軍集注』。
Ⅲ　元嘉三十年（四五三）説……曹道衡「鮑照幾篇詩文的写作時間」。
Ⅳ　元嘉二十八年（四五一）説…丁福林『鮑照年譜』。

思うに、文学作品の制作状況を見定めようとする場合、よほど疑わしいものでない限り、まず伝記資料に沿って制作年代を仮定し、検討を進めるのが穏当である。本作に即して言えば、幸いにも制作地点＝広陵ということが判明しているのであるから、まず鮑照が広陵にいた時期こそ第一に検討されなければなるまい。

ところが、試みに従前の諸説と鮑照の閲歴とを見比べると、意外にも、最も確実に広陵に居たであろう時期が見落とされていることに気づく。すなわち、元嘉十七年から二十年まで、その主君たる臨川王劉義慶の南兗州刺史転任に伴い、鮑照がこれに随従して広陵に赴任した四年間である。そこで本稿では第五の説として、元嘉十七年（四四〇）説（以下、Ⅴ説と称す）を提出し、その当否を論じたい。[4]

僅か一作品の編年考証という小さな問題提起から出発することになるが、筆者が見るところ、「蕪城賦」制作時の状況や撰述意図の解明は、最終的に鮑照の文学の本質にまで遡ってゆきそうな重要問題であるように思われてならない。また、本作は確かに異色作と呼んでも差し支えない独創性に富む辞賦作品であるが、その文学史的意義は、漢魏六朝辞賦文学の展開を探る上で、従来の評価以上に大きいことが明らかになるであろう。本稿は、以上の見通しのもとに、鮑照「蕪城賦」の編年について可能な限り考証を加えた上で、改めて本作の撰述意図を抜本的に問い直そうとする一試論である。

二　「蕪城賦」編年考証

劉義慶は、本伝（『宋書』臨川烈武王道規伝に附伝）に拠れば、元嘉十七年に江州刺史から南兗州刺史に遷り、その晩年を広陵で過ごした。同二十年に病を得、刺史を解かれて建康に戻り、翌二十一年正月に没す。享年四十二。そして、その最期に至るまで、鮑照が義慶幕下にあったことは、彼の「通世子自解（啓）」（『鮑氏集』巻九）から裏づけられる。「今 職とする所を解くことを請ひ、矜許を蒙ることを願ふ。清塵を奉りし自り、茲に於いて六祀。墜辰 永往し、遺恩 心に在り（今請解所職、願蒙矜許。自奉清塵、於茲六祀。墜辰永往、遺恩在心）」。この書簡文は、義慶の死後、その世子哀王燁に提出されたものである。[5] 王国における「所職」を自ら解くことを求めるものであるが、文中に「清塵を奉りし自り、茲に於いて六祀」と、彼が仕官して以来六年が経過したことを記している。なお、元嘉二十一年から六年を遡れば元嘉十六年であり、これは義慶が江州刺史であった時期である。

これらの鮑照及び劉義慶を巡る伝記資料から、本作を元嘉十七年の作と仮定する餘地があることが確認できる。そこで、次に「蕪城賦」本文に基づきつつ、筆者の提唱するV説を検証しようと思う。

「劃崇墉刳濬洫」…編年考証において、重大な手掛かりを与えるものとして、避諱字の使用状況からの推定という手段がある。この方法は、本作の場合にも有効であろう。興味深いことに、本作前半「劃崇墉刳濬洫」句において、始興王（文帝の第二子）の諱である「濬」字が用いられているのである。確かに鮑照は、劉義慶の没後、始興王劉濬に仕えた時期もあるが、もしその頃の作品とするならば、この「濬」字は使われない筈である。

当時、このような場合には、避諱の方法として、別字に置き換えるということが行われていたようである。[6] しかし、「蕪城賦」の現存諸本では、別字に作る例は見当たらなかった。[7] このことは、やはり本作の制作を始興王幕下

時とすることの困難さを裏書きするものである。

ところで、皇祖や皇帝の避諱についてはすでに贅言を要さないであろうが、皇子の諱字の扱われ方については、一応の確認が必要であろう。V説を採用した場合、直接仕えていなかったとはいえ、劉濬はすでに始興王に封ぜられ（元嘉十三年）、揚州刺史となっている。そこで皇子の諱字に対する配慮について調査したところ、次のような使用例があった。顔延之「赭白馬賦」（『文選』巻十四）の「揔六服以收賢、掩七戎而得駿」句に、「駿」字が用いられている（元嘉十七年の作）。当時の武陵王劉駿（後の孝武帝）は、南豫州刺史であった。この例から、直接の主従関係になければ、皇子の諱字を使用することもあったことが判る。

「白楊早落」「塞草前衰」「稜稜霜氣」…「蕪城賦」後半には、その季節が冬であることを示す表現が散見する。例えば、「白楊」は、ヤナギ科の落葉高木であり、葉は秋に黄色に変色して落ち始める。本作では「早落」とあり、すでに葉を落としきった冬の状態であることが示されている。[8]

また、「塞草前衰」句について、李善注は李陵「答蘇武書」（『文選』巻四十一）に「涼秋九月、塞外草衰」とあるのを引く。したがって、この句は一見すると晩秋九月を示すようにも思われるが、「答蘇武書」のこの箇所が北方匈奴特有の気候風土を訴えたものであることに留意する必要がある。草が枯れる時期は、長城以北（「答蘇武書」）では「涼秋九月」かもしれないが、江北広陵（「蕪城賦」）では、それ以降にずれ込ませて解釈されるべきであろう。

そして、「稜稜霜氣」に対する李善注が、これを「嚴冬之貌」とまで断言していることは、以上のような筆者の推定を有力に支持するように思われる。

このように「蕪城賦」後半の季節描写を論じたのは、次の史実と考え合わせた時、従来の編年説では、矛盾が生じると考えたためである。次に列挙するのは、それぞれの編年説において本作の撰述動機とされる事件である。

Ⅳ説…元嘉二十八年二月、一時的に瓜歩山まで進出していた北魏軍が退却。解厳。

Ⅲ説…元嘉三十年二月、太子劭と始興王濬に対する廃太子及び賜死の決定。同月、文帝弑逆事件。
Ⅱ説…大明三年七月、沈慶之、竟陵王誕の乱を鎮圧。
Ⅰ説…大明六年七月、臨海王劉子頊、荊州刺史に任ぜられ江陵に赴任。

以上のように、冬に起きた事件はひとつもないのである。[9] これら諸説に対し、本作が冬の作だとした場合に整合性が生じるのは、元嘉十七年説だけである。と言うのも、劉義慶が南兗州刺史に任ぜられたのが、まさに元嘉十七年冬十月のことだからである。[10]

「出入三代五百餘載」…まず、漢〜六朝期広陵の位置的変遷の有無を確認しておきたい。この問題については、文献資料よりも、考古学的調査を踏まえて考証するのが有効であろう。一九七八年に行われた揚州古城発掘調査[11]に拠れば、漢代の堆積層（第二層）の上層（第三層）から、一部に磚築を用いた城壁跡と磚甓で舗装された路面が出土したという。就中、東晋桓温時代のものとされる「北門磚」の発見は、晋代広陵が漢代遺構の上に成り立っていたことを示す有力な物証である。つまり、考古学的に見た漢代広陵と六朝期広陵は、ほぼ同一地点に重なると考えられるのである。[12]

さて、以上の位置関係を踏まえた上で、「三代五百餘載」の問題を検討しよう。「蕪城賦」の前半部分に相当する全盛時の描写は、次のように締め括られる。「觀基扃之固護、將萬祀而一君。出入三代五百餘載、竟瓜割而豆分（基扃の固護を観るに、将に万祀にして一君ならんとす。出入すること三代五百餘載、竟に瓜のごとく割れ豆のごとく分かる）」。すなわち、万代にわたって繁栄するかに見えたこの都市も、三代五百餘年にわたる消長を経て、瓜のように割れ、豆のようにバラバラになってしまった、というものである。かくて、続く後半部分では、無残にも荒れ果てた廃墟の描写が展開される。

ところで、李善注をはじめとする従来の諸注釈は、「三代」・「五百餘載」を、漢から魏（呉）、そして晋までの

王朝	年号（西暦）	事項	年数
前漢景帝	前三年（前154）	呉王劉濞、広陵にて挙兵（呉楚七国の乱）。	0
東晋廃帝	太和四年（369）	桓温による修築。	522
安帝	隆安五年（401）	孫恩の乱。盧循、広陵を陥落せしむ。	554
宋　文帝	元嘉八年（431）	広陵を南兗州治とする。	584
		Ⅴ元嘉十七年（440）説（筆者）	593
	元嘉二十四年（447）	徐湛之による修築。	600
	元嘉二十七年（450）	北魏侵攻。	603
		Ⅳ元嘉二十八年（451）説（丁福林）	604
		Ⅲ元嘉三十年（453）説（曹道衡）	606
孝武帝	大明二年（458）	竟陵王劉誕による修築。	611
	大明三年（459）	竟陵王の乱	612
		Ⅱ大明三年（459）説（何焯・銭仲聯）	612
		Ⅰ大明六年（462）説（五臣注）	615

解明である。

右の表[11]は、漢～宋までの広陵の沿革を年表にしたものである。従来は、戦災によって壊滅的打撃を受けた時期から、本作の編年が推定されてきたのであるが、筆者は視点を変えて、広陵の修築に着目した。

呉王濞挙兵の直接的原因は、諸王の勢力拡大を憂えた御史大夫鼂錯の削地政策に対する反発であって、広陵を国三王朝、五百餘年間と解釈する。これは前漢の呉王劉濞に着目し、その時代（呉楚七国の乱の挙兵は前一五四）を「五百餘載」の起点としたものであり、その五百年後は、東晋期に当たる。その点では従来の解釈に異論はない。しかし、問題はそうした王朝名の比定で片付けられるわけではない。より重要な点は、なぜ「出入」[13]の期間として「五百餘載」という数値を設定したのかという疑問の

都とする呉国の繁栄がピークに達していたのは挙兵直前と見て良い。[15] そこで、この年（前一五四）を基準（0年）として計算すると、桓温による修築まで五二二年、これに対して徐湛之までは六〇〇年、竟陵王誕の場合は六一一年を数える。これは動かしがたい事実である。

ここでひとつの分水嶺として注目したいのは、元嘉二十四年の徐湛之による修築の記事である。

二十四年、服闋（きは）り、中書令に転じ、太子詹事を領す。出でて前軍将軍・南兗州刺史と為る。政を為すに善く、威恵 並びに行はる。広陵城 旧（も）と高楼有り、湛之 更に修整を加へ、南のかた鍾山を望む。城北に陂沢有り、水物豊盛たり。湛之 更に風亭・月観・吹臺・琴室を起こし、果竹 繁茂し、花薬 成行し、文士を招集し、遊玩の適を尽くすこと、一時の盛んなり。[16]

（『宋書』徐湛之伝）

徐湛之は宋高祖劉裕の外孫に当たる貴公子（母は文帝の姉会稽公主）である。元嘉二十四年、南兗州刺史となるや、その財力をもって楼閣や園池等を起工し、また文壇を主催して楽しみ耽ったという。

右の記事から察する限り、あたかも「全盛之時」を思わせるような繁栄ぶりであるが、これは呉王濞の滅亡から数えてちょうど六〇〇年後のことなのである。確かに広陵は、この束の間の殷賑からわずか三年後に北魏の侵攻を受け、文帝の焦土作戦による壊滅という事態に見舞われる。[17] もし仮に「蕪城賦」本文が「六百餘載」に作るならば、確実に元嘉二十四年以後の作品と言えるであろう。しかし、管見の限り、そのように作るテキストは見られなかった。だとすれば、「蕪城賦」は元嘉二十四年以前に制作された作品と考える方が妥当のようである。なぜならば、「蕪城賦」は「全盛」以後の「衰退と再建（出入）」の時期を「三代五百餘載」までとし、それ以降を「瓜のごとく割れ豆のごとく分か」れた廃墟として描いているのであるから、元嘉二十四年以後とする編年説では、徐湛之時代の繁栄とその後の滅亡という急転直下の劇的な悲運を、鮑照が無視したと解釈することになるのである。

「五百餘載」は、文字通りに解すれば、桓温の修築を含む期間と考えられよう。そして、筆者が調査した限りでは、

元嘉十七年までに桓温以上の大規模な修築が行われた記録はなく、劉義慶に随従して当地に赴任した鮑照が見たのは、桓温広陵城であった公算が高い。つまり、呉王濞から数えて「五百餘載」＋桓温の修築後七十一年を経た広陵城である。なぜ「五百餘載」という期間が設定されたのかという疑問に対して、V説の立場に立つことによって説明するならば、それは、鮑照が眼前の桓温広陵城の沿革を辿った結果、と推定される。[18]

以上、「蕪城賦」本文に拠りつつ、本作が元嘉十七年の作であることの検証を終えた。[19] が、この説の最大の疑問は、なぜ鮑照が、かくも徹底的に荒れ果てた廃墟として広陵を描いたか、という点に尽きる。思うに、新たな赴任地での作にしては、その感傷的な口振りとは裏腹に、そこを治める劉義慶や広陵土着の郷党に対する配慮に欠けた、あまりにも冷厳酷薄な執筆態度である。鮑照が訪れたときの広陵の状態は、現在の我々には最早知るよしもない。賦後半が実景でない可能性も充分に孕んでいるであろう。[20] 判っているのは、鮑照がそのように描いたという事実だけである。我々としては、これを単なる虚構とする安易な解決策を採るわけにはいかない。そこで、次に廃墟や遺蹟を詠じる一連の文学作品との比較を通して、鮑照の撰述意図を跡づける端緒をつかみたいと思う。

三　廃墟の文学史と「蕪城賦」の構想

廃墟や遺蹟を描いた漢魏以来の文学作品[21]には、滅亡の原因に対する批判と反省に主眼を置いたものがある。廃墟の文学史の中でも比較的早い段階から、その傾向は見られる。

其の後 箕子 周に朝し、故(もと)の殷虚に過(よ)ぎり、宮室の毀壊せられ、禾黍を生ずるに感ず。箕子 これを傷み、哭さんと欲すれども則ち可ならず、泣かんと欲すれども其れ婦人に近く、乃ち麦秀の詩を作りて以てこれを歌詠す。其の詩に曰く、「麦秀 漸漸たり、禾黍 油油たり。彼の狡僮、我と好からず」と。謂ふ所の狡童なる者は、

紂なり。殷の民これを聞き、皆為に流涕す。[22]　（『史記』宋微子世家）

殷の旧臣箕子が「哭」することができなかったのは、現体制たる周王朝に対する遠慮であろう。そこで箕子は「麦秀」の詩を詠じるのであるが、『史記』では詩中の「狡童」を殷王朝を自滅に導いた紂王であるとし、その非難を盛り込んだ作品と解釈している。

また、時代は下って東晋末の顔延之「北使洛[23]」詩にも

前登陽城路　日夕望三川　　前(すす)みて陽城の路に登り、　日夕　三川を望む。
在昔輟期運　經始闊聖賢　　在昔(むかし)　期運を輟し、経始するも聖賢を闊(むな)しくす。
伊穀絶津濟　臺館無尺椽　　伊穀　津済　絶え、臺館　尺椽無し。
宮陛多巣穴　城闕生雲煙　　宮陛　巣穴多く、城闕　雲煙を生ず。　（『文選』巻二十七）

と、「聖賢」を得られなかった西晋の失政を詠じるくだりがある。

しかしながら、鮑照「蕪城賦」は、廃墟を描くという点ではこれらの系列に連なるものの、「麦秀」詩や「北使洛」詩等、滅亡の原因を追究する作品とは性格を異にしている。「蕪城賦」では、過去の栄光を回想した後、「天道如何ぞ、恨みを呑む者多し」と、「恨」みを「呑」みこんで眠る者たちへのひたすらな哀惜を詠じるのみであって、荒廃するに至った責任の所在については、一切口をつぐんでいるのである。

この「天道如何」という句は、一見すると達観や諦観のように思われるが、もしも呉王劉濞＝劉義慶、漢室＝宋室という比定が成り立つならば（第四節に後述）、巧みに責任問題の追及を回避した世俗的政治的発言としての側面が認められる。なぜならば、呉王濞（＝劉義慶）に責を負わせないとすれば、漢室（＝宋室及び廷臣）を指弾せざるを得ないにも関わらず、鮑照は「天道」に問いかけることによって、いづれの罪も問わないからである。[24]

このことと密接に関連するであろうが、表現面においても「蕪城賦」は特異な点がある。従来の辞賦作品では、廃墟を歌枕として、そこに関連深い人物を詠み込んでおり、また、その人物と故事に作者の境遇や心情が投影される。賦というものが具体的事物を敷陳してゆく手法を採ることから考えれば、普通のことである。その一例として、後漢期の代表的な紀行賦である曹大家「東征賦」を挙げよう。目的地の陳留郡長垣県（河南省）に到着した彼女が目にしたのは、荊棘の生い茂る「蒲城」の廃墟と蘧伯玉の塚であった。

蒲城の丘墟を睹れば、荊棘の榛榛たるを生ず。惕として覚寤して顧みて問ひ、子路の威神を想ふ。衛人 其の勇義を嘉し、今に訖るも称すと云ふ。蘧氏 城の東南に在り、民 亦た其の丘墳を尚ぶ。唯だ令徳は不朽を為し、身 既に没するも 名 存す。惟れ経典の美する所、道徳と仁賢とを貴ぶ。[25]（『文選』巻九）

ここで彼女が廃墟を詠じたのは、息子の左遷という失意の境遇の中で、当地に所縁の深い子路と蘧伯玉とに処世の規範を求め、一地方官の母として新生活の抱負を詠み起こすためである。

他にも、荊州に乱を避けた王粲「登楼賦」（『文選』巻十一）中に、楚昭王や范蠡（共に敗亡の身から逆転劇を果たした）の墳墓を詠み込んでいることや、長安令として赴任した潘岳が「西征賦」（『文選』巻十）にて、長安宮殿跡を詠じる際に、漢の功臣を列挙したことも、同様の手法と言える。

ところが「蕪城賦」は、これら先行作品と比べると、舞台が広陵であることや呉王劉濞のことについて、異常とさえ言えそうなほど周到に明言を避けているように見受けられる。

それは、固有名詞の寡少なことに表われている。冒頭の「蒼梧」・「漲海」・「鴈門」等は具体的地名ではあるが、これは中国全体の広さを言うものであって、ここから直接に広陵という都市が導き出されるものではない。ただ、僅かに「他（ひ）くに漕渠を以てし、軸するに崑崗を以てす（他以漕渠、軸以崑崗）」の二句だけが、縦横に走る運河とこれに囲まれた丘陵（「崑崗」＝蜀岡）という広陵の地理的特徴を示唆するだけである。

また、人物も登場しない。このことは、鮑照に僅かに先行する謝霊運「撰征賦」と見比べてみれば、一層判然とするであろう。

高堞に登りて以て詳覧し、吳濞の衰盛を知る。東南の逆気を戒め、劉后の賦聖を成す。塩鉄の殷阜に藉り、淮楚の剽軽に臨む。几杖を盛んにして心を弭んずるも、局を抵つに怒りて遂に争ふ。爰盎の禍を扶くるに忿り、徒に家令を傷つくるを惜しむ。條侯の忠毅に匪ずんば、将に七国の正を陵ぐことあらんとす。漢藩の民を治めて、並びに賢を訪ねて以て明を招くを褒む。文辯を侯つに其れ誰か在らん、曰く鄒陽と枚生と。忠に拠りて呉朝を辞し、義を執りて梁庭に説く。高才を兎園に敷き、正言すと雖も刑を免る。[26]　（『宋書』謝霊運伝）

右は、彭城（江蘇省徐州市）に向かう途上、広陵にて呉王濞と呉楚七国の乱のことを回想した箇所である。「呉濞」・「劉后（邦）」・「爰盎」・「家令（鼂錯）」・「條侯（周亜夫）」・「鄒陽」・「枚生（乘）」等、呉楚七国の乱をめぐる主要人物が登場しており、固有人名の使用という観点からすれば、鮑謝の作風の違いは明白である。

ここまで論じてくれば、「蕪城」とは一体何か、という根源的な問いが生じよう。むろん第一義としては、従来通り、荒「蕪」した「城」という解釈で問題ない。しかし、考えてみれば、都市を描く賦題には「《国名》＋都」・「《方向名詞》＋都／京」等はあるが、[27]「蕪城賦」は「《形容詞》＋城」であって、この賦題もまた直接に広陵を指し示すものではない。愚考するところ、「蕪」は「無」と同音であり、かつ字形の中にこれを含むことから推せば、「蕪城」とは「無城」、すなわち実在しない都市の謂いではあるまいか。[28]これは憶測ながら、上述の比較結果からすれば、あながちあり得ないことではない。

ともかく、鮑照には「蕪城」が広陵であることを仄めかしつつも、一方でそれを押し隠そうとする意図があったことは、ある程度明確に読み取れる。換言するならば、本作は、広陵が舞台であることや、呉王濞と呉楚七国の乱のことを明示せずとも、それとなく悟られることを見越して制作されたことを示唆していると言えよう。というよ

りも、本作の歯がゆいばかりの隠微さ、婉曲さは、無用の言質を取られることを拒否しているかの如くである。

だとすれば、「蕪城賦」が生み出された経緯には、何かただならぬ事情が介在していたように思われてならない。この問題は、従来のように鮑照を一個の独立した文人として捉える限りは解決するまい。[29] しかし、劉義慶と鮑照とを君臣一体として考えれば、比較的容易に理解できるであろう。

四　劉義慶の晩年

劉義慶が南兗州刺史に転任した背景は、およそ次のようなものである。元嘉十七年十月、義慶の転任直前のこの時期に、宋朝のその後の命運を決定的に方向づける政争が起こった。すなわち、それまで文帝の右腕として輔弼の大任に当たっていた皇弟劉義康の失脚である。具体的には、劉湛以下の義康派「朋党」の粛清と義康本人を江州刺史として左遷したことであり、以後、義康が政治の表舞台に立つことはなかった。この処分に伴い、それまで江州刺史であった義慶は、広陵へ赴任することになる。安田二郎氏が、この「義康事件」の政治史的意義として、藩屏であった筈の兄弟諸王が文帝の敵対物に転じた、と論じておられることは、蓋し問題の核心を衝いたものであろう。[30] この事件を境に、文帝の弟王たちは、それまでの勤務態度と生活を一変させたのであった。[31]

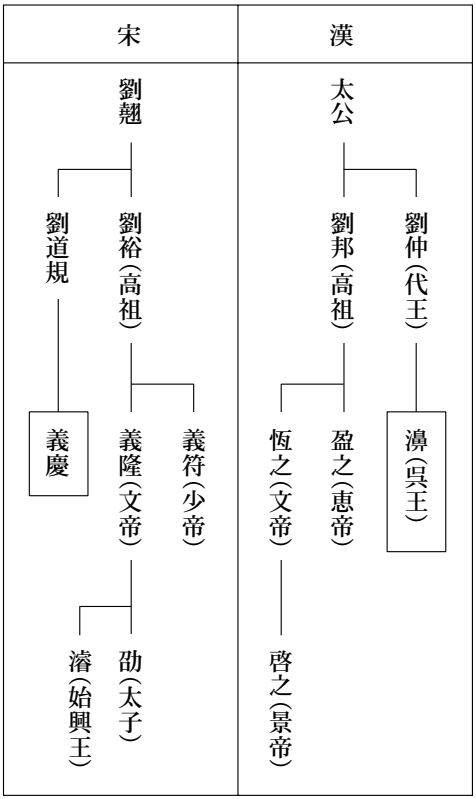
義慶についても、この事件がその後の身の処し方に重大な影響を与えたことは、充分に考えられる。が、ここで注意したいのは、義慶の場合、彼が他ならぬ広陵に転任したこと自体に、鮑照をして渾身の力作「蕪城賦」を製作せしめる要因を備えていたことである。

それは、第一に、広陵という都市の持つイメージである。宋朝にとって広陵は、かつて高祖劉裕の軍事的基盤となった「北府軍」の根拠地であり、荊州江陵と並ぶ東西の雄藩であった。したがって、義慶の転任は、彼が文帝か

らの信頼を未だ失っていないとも解釈しうる。しかしその一方で、広陵は軍事上の要衝であるがゆえに、しばしば王朝を脅かす「内患」の温床ともなる。後の竟陵王誕がまさしくこれに当たるが、間近くは、文帝の治世初期にこの地に拠った檀道済がある。さらに東晋に遡れば、桓温も晋朝を一時的に牛耳った奸雄である。そうした「内患」の歴史の中で、時間的にも規模から見ても筆頭に挙げられるのが、前漢の呉王劉濞なのである。

そもそも広陵という都市は、春秋の頃に呉王夫差が邗江に築いた城（『左伝』哀公九年）を嚆矢とするが、六朝諸家の記録に拠れば、むしろ呉王濞の築いたものとして、また、呉国に封ぜられた彼の王都として認識されていたようである。例えば、「蕪城賦」李善注は「郡城、呉王濞所築」という王逸『広陵郡図経』を引く。その他、「徐広 曰く、荊王劉賈 呉に都し、呉王 広陵に移るなり（徐廣曰、荊王劉賈都呉、呉王移廣陵也）」（『史記』呉王濞列伝・裴駰『史記集解』）、「呉王濞の都する所、城周は十四里半（呉王濞所都、城周十四里半）」（『後漢書』郡国志・劉昭注）、「高祖六年 荊国と為り、十一年 呉城と為る。即ち呉王濞の築く所な

【漢宋劉氏略系図】



り（高祖六年爲荊國、十一年爲吳城。卽吳王濞所築也）」（『水経注』巻三十 淮水）。これらは全て、広陵が呉王濞のイメージを色濃く漂わせた都市と考えられていたことを、証言するものである。前節所掲の謝霊運「撰征賦」もその一証左となるであろう。

第二の事実として、呉王濞と義慶の系図上の相似を挙げたい。上図は、漢と宋それぞれの劉氏の略系図である。[32] 濞は劉邦の兄仲の子であり、漢の文帝の従兄弟に当たる。義慶もまた裕の弟道規の子（養子。実父の道憐も裕の弟）であり、宋の文帝の従兄弟である。劉仲が邦の兄、道規が裕の弟であることを除けば、両者は鏡像の如く酷似している。また、宋室が漢の末裔を称したことは、この系図上の相似を人々が想起することを、一層容易ならしめたであろう。[33]

これらは、個別に見れば偶然の一致とも言える、取るに足らない瑣末な事柄ではある。しかし、当時この種の「偶然」をことのほか喜ぶ風潮があったこともまた事実である。第三に、当時の揶揄の風潮を示す事例を挙げる。

A．時に尚書令傅亮 自ら以へらく 文義の美は、一時に及ぶもの莫しと。延之 其の才辞を負み、之が為に下らず、亮 甚だ焉を疾む。廬陵王義真 頗る辞義を好み、待接 甚だ厚く、徐羨之等 延之 同異を為すかと疑ひ、意 甚だ悦ばず。少帝 即位し、以て正員郎と為し、中書を兼ねしむ。尋ひで員外常侍に徙り、出でて始安太守と為る。領軍将軍謝晦 延之に謂ひて曰く「昔 荀勗 阮咸を忌み、斥けて始平郡と為す。今 卿 又た始安と為る。二始と謂ふべし」と。[34]（『宋書』顔延之伝）

B．脩之 州主簿より司徒従事中郎に遷る。文帝 謂ひて曰く「卿の曾祖 昔 王導丞相の中郎と為り、卿 今 又た王弘の中郎と為る。爾の祖を忝めずと謂ふべし」と。[35]（『宋書』朱脩之伝）

C．（謝晦）初め荊州と為り、甚だ自矜の色有り。将に鎮に之かんとするに、従叔の光禄大夫澹に詣り別る。澹 晦の年を問ふ。晦 答へて曰く「三十五」と。澹 笑ひて曰く「昔 荀中郎（羨）年二十七にして北府都督と為

る。卿 これに比すれば、已に老い為り」と。晦 愧づる色有り。[36]　（『宋書』謝晦伝）

Aは、徐羨之らに疎まれて始安太守に遷された顔延之（三八四～四五六）に対して、西晋の頃に同様の事情で始平郡の太守となった阮咸の故事を重ねて「二始」と言ったもの。Bは、朱脩之が文帝の寵臣王弘（三七九～四三二）の幕僚となったことに対して、その曾祖父（朱燾）が東晋の名宰相王導（二七六～三三九）に仕えたことを持ち出して「先祖の名に恥じない」としたもの。Cは荊州刺史となったことに有頂天になっていた謝晦（三九〇～四二六）に、さらに若くして北府都督となった荀羨（「中郎」。三二二～三五九）と比較することによって、冷や水を浴びせたものである。

ひとくちに揶揄と言ってもその形は様々であるが、右の事例が全て、転任の際に過去の著名人を引き合いに出すことによって成り立っている点に注目されたい。史書等には、義慶が右の類の揶揄を受けたという直接的記述は見当たらないが、以上の事例から推して、それは充分に予想されることであり、且つその場合、餘人ならぬ「呉王劉濞」に比定される可能性が最も高いであろう。

以上を要するに、文帝と諸王との間に隙を生じた元嘉十七年現在、義慶は、周囲から呉王劉濞の影を二重映しにされることを、否応なく意識させられる状況に立っていたのである。かかる状況下において制作された「蕪城賦」が、単に鮑照の個人的感懐を詠じたものであるとは、到底考えられない。むしろ、如上の揶揄の風潮を意識した対抗策として制作されたと考えるのが適当である。そして、本作の撰述意図をこのように捉えることによって、前節までに論じた本作の特徴に、一応の説明をつけることができる。

筆者は、前節において「蕪城賦」が滅亡の原因について言及していないことを指摘した。本作が、文帝以下、建康の廷臣たちまでも読者とすることを狙ったとすれば、当然すぎるほど当然な政治的配慮である。また、呉王劉濞＝劉義慶と比定する側にとってみれば、本作が広陵を舞台として、その興亡を描くものであると判断するのは、造

作もないことであろう。日常的に右掲の揶揄をやりとりしている劉宋貴族社交界は、その有力な候補なのである。[37]

こうした背景を踏まえて、「蕪城賦」が広陵を荒廃した無人の廃墟として詠じた意義を推定するならば、文帝以下の貴族社交界から寄せられる一種の人物批評に対して、これを巧みに受け流そうとする文学的釈明であったことが考えられる。「蕪城賦」は、広陵の「全盛」期とその夢の跡を丸ごと切り出したものであるが、これは、呉王濞のような栄耀栄華も「千齢」・「萬代」（「蕪城之歌」）の後には一切が消え失せるのだ、という虚しい結末を示したものに他ならない。

元嘉十七年以降の劉義慶の動向から、右の推定を検証しておこう。南兗州刺史時代、すなわちその晩年における義慶は、たとえ浪費によって晩節を汚そうとも仏教に耽溺する道を選択した。

歴藩を受任するも、浮淫の過無し。唯だ晩節に沙門を奉養し、頗る費損を致す。[38]　（『宋書』本伝）

これが直ちに政治的韜晦のポーズであるとの即断はできないかも知れないが、少なくとも政治から逃避しはじめた他の諸王と足並みは揃っている。[39] また、結果的に彼は、ひたすら自己一身の安泰を願う小心な王族という評価を世上から下されたようである。このことは、当時興味本位に語られていた「小説」に端的に表されている。

長沙王道憐の子 義慶、広陵に在りて疾に臥す。食らひし次、忽として白虹の室に入る有り。就ち其の粥を飲む。義慶 器を階に擲つ。遂に風雨の声を作し、庭戸に振るう。良や久しくして見えず。[40]

（劉敬叔『異苑』巻一）

義慶 広陵に在りて、疾有り、而して白虹 城を貫き、野麕 府に入る。心に甚だこれを悪み、固く陳して還るを求む。太祖 州を解くを許し、本号を以て朝に還る。[41]　（『宋書』本伝）

白虹と言えば、秦の始皇帝暗殺を計画していた燕太子丹の故事がそうであるように、暗殺・兵乱の予兆とされる場合がある。『宋書』の記事では、白虹の他に「野麕入府」という事件も起きているが、野生動物が宮殿に侵入す

るという記事を収集してみると、やはり叛乱や取り潰しの予兆と見られる例があった。[42] これらの凶兆を、義慶が忌み嫌ったのも至極当然である。

さらに南朝歌謡「烏夜啼」の成立には、より直接的な故事が附随している。

元嘉十七年、彭城王義康を予章に徙す。義慶 時に江州為(た)り。鎮に至り、相見(まみ)えて哭す。帝の怪しむ所と為る。徵されて宅に還り、大いに懼る。[43]

（『旧唐書』音楽志　清楽）

ここには、義康に対する同情と同時に、文帝に対する義慶の恐懼が明白に描かれている。

以上は確かに「小説」であるが、同時代人による証言として傾聴すべきものである。これらの例から、義慶の叛心の有無が当時の朝野の重大な関心事であり、同時に、文帝の視線に恐れおののき、不吉な兆験を極度に忌み嫌う小心な劉義慶像が形成されていたことが判るのである。こうした義慶像の形成には、その晩年の動向が大きく反映されている筈である（右の「小説」三例がいづれも元嘉十七年以降のこととされている点に注意されたい）。彼の仏教への傾注も、その一因となっているであろう。

してみれば、筆者の推定した「蕪城賦」の性格も、かかる義慶晩年の保身意識と、そう大きくは外れないようである。本作の制作が、義慶の命令によるものか、鮑照の自発によるものか、今その判断を下すだけの材料はない。しかし、いづれにせよ主君の破滅が即ち鮑照自身の破滅であることは、自明の理である。鮑照を「蕪城賦」制作に突き動かしたのは、君臣一体となった「明哲保身」の処世観であった。

以上、鮑照「蕪城賦」の制作が元嘉十七年であったことを考証し、当時の主君劉義慶の立場を明らかにした上で、本作の撰述意図が、無責任な人物批評（揶揄）を受け流すべく、敢えて蕭条たる「蕪城」の様子を詠じるものであったことを論じてきた。

筆者の結論は、却って本作の特異性を浮き彫りにする結果となったかもしれないが、鮑照と似た立場から輿論へ

の反駁を企図した辞賦作品には、前例がないわけではない。かつて後漢の頃に出た班固の代表作「両都賦」は、その序に拠れば、長安遷都を画策する「耆老」たちの、盛んに長安を賛美し洛陽を貶す「議」を論破しようとした、と言う。[44] 宣伝工作が風評に頼る他ない時代において、人口に膾炙する文学作品と、これを制作しうる有能な文人は、単なる娯楽提供者としてばかりでなく、王侯貴族の宣伝戦略を支える上でも、まことに有用なのであった。[45]

注

(1) 本論文では、『四部叢刊』所収毛斧季校宋本『鮑氏集』(巻一)を底本とした。他、『文選』については、胡克家重刻宋淳熙刊李善単注本(一九六七年、藝文印書館景印。巻十一。以下、注記のない限り、この本を『文選』と称す)、南宋紹興三十一年(一一六一)建陽陳八郎崇化書坊刊五臣注単行本(台北国立中央図書館蔵、一九八一年景印。巻六)、南宋明州刊六家注本(足利学校遺蹟図書館蔵、一九七四年景印。巻十一)、明嘉靖年間呉郡袁褧嘉趣堂倣宋刊六家注本(巻十一)、明宣徳三年(一四二八)刊六家注本(韓国、奎章閣・成均大学校蔵、一九八三年景印。巻十一)、『四部叢刊』所収南宋刊六臣注本(一九二九年、上海涵芬楼蔵本景印。巻十一)の諸刊本を参照。また、明張溥『漢魏六朝百三名家集』所収『鮑参軍集』(巻一)、汪紹楹校『藝文類聚』巻六十三 居処部 城(一九七三年、中華書局)をも参照した。なお、鮑照の伝記は幸福香織「鮑照」(興膳宏編『六朝詩人伝』、二〇〇〇年、大修館書店。四六二〜四六六頁)を参照。

(2) 李善は謝朓「和伏武昌登孫権故城」詩(『文選』巻三十)の「舞館識餘基」句の注として、本作「歌堂舞閣之基」句を挙げる。また、呉均「呉城賦」(『藝文類聚』巻六十三 居処部 城)の「木魅晨走、山鬼夜驚」句は本作「木魅、山鬼、野鼠城狐、風に嗥え雨に嘯き、昏に見れ晨に趨る(木魅山鬼、野鼠城狐、風嗥雨嘯、昏見晨趨)」句を襲ったものと思われる。

(3) Ⅰ説は注(1)の『文選』諸刊本の五臣注。以下、Ⅱ説…何焯『義門読書記』巻四十五、及び銭仲聯『鮑参軍集注』(一九八〇年、上海古籍出版社)附録の「鮑照年表」。Ⅲ説…曹道衡「鮑照幾篇詩文的寫作時間」(『文史』十六号、一九八二年。のち『中古文学史論集』一九八六年、中華書局。四〇三〜四二六頁)。Ⅳ説…丁

福林『鮑照年譜』（二〇〇四年、上海古籍出版社。九十～九十五頁）をそれぞれ参照。

（4）本来ならば、元嘉二十年（四四三）まで含めて論じるべきであるが、ここでは省略した。この四年間の中でいづれの年であるかを探るのは、資料的に困難な上、あまり意味がないように思われるからである。また、第四節で述べる本作の制作背景を勘案するならば、やはり元嘉十七年の作である可能性が最も高い。

（5）「墜辰永往」の句は、『論語』為政篇「子曰く、政を為すは徳を以てす。譬ふれば北辰の其の所に居りて衆星これと共にするが如し（子曰、爲政以德。譬如北辰居其所而衆星共之）」を踏まえる表現であり、主君の死を指す。劉義慶の没後、鮑照がその幕下を離れたことは、「臨川王服竟還田里」詩（『鮑氏集』巻五）からも窺える。

（6）例えば、『世説新語』文学篇に、東晋の庾闡が「揚都賦」を庾亮に示す際、「溫挺義之標、庾作民之望。方響則金聲、比德則玉亮」句の「亮」字を「潤」字に改めたという故事を収載する。

（7）注（1）の諸本を参照。

（8）陶淵明「挽歌詩」（『文選』巻二十八）の冒頭に「荒草 何ぞ茫茫たる、白楊も亦た蕭蕭たり。厳霜 九月の中、我を送りて遠郊に出づ（荒草何茫茫、白楊亦蕭蕭。嚴霜九月中、送我出遠郊）」と、「白楊」の葉が風に吹かれて蕭蕭と音を立てるのを九月半ばのこととして用いている例がある。すでに葉が落ちている「蕪城賦」の場合は、早くとも晩秋九月中旬以降であることを示す表現と考えられる。

（9）諸説について、いくつか補足しておこう。Ⅳ説…対北魏戦後、文帝は被害地域に対して復興策を講じた詔勅をただちに発している（『宋書』文帝紀）。彼なりに敗戦の責任を果たそうとしたことは、建設的な態度と言って良いであろう。この年の冬に制作された諷喩の賦（丁氏前掲書）と見るには、あまりにも時機を失していよう。Ⅲ説…丁氏前掲書は、太子劭と始興王濬の弑逆が、廃太子の報に接した劭が濬と共謀して父殺しの暴挙に出たという突発的事件であって、そこに諫言を差し挟む時間的余裕はなかった、とする。これは、文帝弑逆事件に関する『宋書』の諸記録から素直に導き出された卓見であって、筆者もこれに左袒するものである。事件は全て二月中に発生したのであり、「蕪城賦」を前年冬の作と見ることも、やはり大いに矛盾すると言わねばならない。Ⅱ説…すでに曹・丁両氏に反論があるので、ここでは詳論しないが、傍証として次の

事例を補足しておきたい。孝武帝治世下において、竟陵王＝広陵側の犠牲者に同情を寄せることの困難は、何も鮑照に限ったことではなかった。『宋書』蔡興宗伝に言う、「竟陵王誕 広陵城に拠りて逆を為す。事 平らぎ、興宗 旨を奉じて慰労す。州別駕范義 興宗と素より善し。城内に在りて同じく誅せらる。興宗 広陵に至り、躬自ら殯を収め、喪を致し予章の旧墓に還す。上 これを聞き、甚だ悦ばず（竟陵王誕據廣陵城爲逆。事平、興宗奉旨慰勞。州別駕范義與興宗素善。在城内同誅。興宗至廣陵、躬自收殯、致喪還豫章舊墓。上聞之、甚不悅）」と。叛乱に巻き込まれた友人の遺体を収容し、これを弔ったがために、蔡興宗は孝武帝の不興を買っている。

(10) 『宋書』文帝紀を参照。なお、銭氏前掲書（三〇七頁）は、鮑照「還都道中」三首・「還都口号」・「行京口至竹里」・「発後渚」等の詩を、任地広陵へ向かう一時の作としているが、それは、これらの詩の共通点として、やはり初冬の作であることを示す表現が見られることによるものである。

(11) 尤振尧「揚州古城一九七八年発掘簡報」（『文物』二八〇号、第九期、一九七九年九月。のち『南京博物院集刊』第三巻、一九八一年、南京博物院。六十七～七十七頁）、及び羅宗真『六朝考古』（一九九四年、南京大学出版社。のち中村圭爾・室山留美子編訳『古代江南の考古学―倭の五王時代の江南世界』二〇〇五年、白帝社）を参照。

(12) 曹氏は、『文選』李善注の「登廣陵故城」から、劉宋時の広陵城とは別個の漢代広陵故城址の存在を想定しておられる（前掲論文）。が、現在のところ考古学的な確認はできていない。また、もしも劉宋広陵城と漢代広陵故城址の二者が併存していたとすれば、筆者の提唱する元嘉十七年にも漢代故城址はあったということになるので、元嘉三十年（四五三）とするⅢ説の必然性は失われるように思われる。

(13) 『荘子』知北遊篇に「人の天地の間に生くるは、白駒の郤を過ぐるが若く、忽然たるのみ。注然勃然として、出でざる莫く、油然蓊然として、入らざる莫し。已に化して生まれ、又 化して死す（人生天地之間、若白駒之過郤、忽然而已。注然勃然、莫不出焉、油然蓊然、莫不入焉。已化而生、又化而死）」とあり、「出入」とは、生命の誕生と消滅を表す語と考えられる。これを都市に当て嵌めるならば、「衰退と再建」ほどの意味であろう。

(14) 年表は『史記』・『漢書』・『晋書』・『宋書』を基礎資料として作成。また、紀仲慶「揚州古城址変遷初探」（『文物』二八〇号、第九期、一九七九年九月）を参照した。

(15) それ以前に、前漢の文帝の時、入朝した呉王劉濞の太子が、皇太子（後の景帝）と賭博のことで争い、盤を投げつけられて死んでしまったという有名な事件がある（『漢書』荊燕呉伝）。しかし、この事件は劉濞の参内中止以上には発展しなかったのであり、あくまでも間接的原因に過ぎない。

(16) 二十四年、服闋、轉中書令、領太子詹事。出爲前軍將軍・南兗州刺史。善於爲政、威惠並行。廣陵城舊有高樓、湛之更加修整、南望鍾山。城北有陂澤、水物豐盛。湛之更起風亭・月觀・吹臺・琴室、果竹繁茂、花藥成行、招集文士、盡遊玩之適、一時之盛也。

(17) 『宋書』索虜伝に拠れば、住民を長江南岸に避難させ、広陵を焼き払ったのは文帝の勅命であった、という。

(18) このように考えてくると、従来の編年説の立場から次のような仮説が提出されるのではないか。すなわち、「五百餘載」とは、同時代の事として直截的に述べることを避けるべく、東晋期のこととして仮託した婉曲表現ではないか、と。しかし、この説が成り立つためには、前提条件として、北魏南侵時や竟陵王の乱時に相当する戦禍が、桓温の修築直後にあったとしなければならない。前代の事に仮託するのであれば、「四百餘載」でも「三百餘載」でも構わない筈だからである。仮に、これを孫恩の乱としよう。もし、元嘉十七年の時点で戦禍の傷跡を色濃く残していたとすれば、その時点で「蕪城賦」製作は可能であったことになる。逆に、さほど被害の跡が窺えなかったとすれば、そもそも孫恩の乱に仮託する必然性を失う、という深刻な自家撞着に陥るであろう。

(19) 従来の編年説の多くは、「蕪城賦」後半の廃墟を戦争によって破壊されたものと見なしている。これに対して、曹道衡氏のみが、必ずしも戦争と結びつける必要はないと論じておられる（前掲論文）。まことに傾聴すべき卓論である。確かに「沢葵 井に依り、荒葛 塗（みち）に罥（かか）る（塗澤葵依井、荒葛罥塗）」、「崩榛 路を塞ぎ、崢嶸たる古馗あり（崩榛塞路、崢嶸古馗）」等の野生植物のはびこる様子や、「通池 既（すで）に夷ぎ、峻隅 又た已（たひら）に頽る（通池既已夷、峻隅又已頽）」という埋もれた堀や崩落した城壁の描写は、これを素直に読む限り、相当長期に及ぶ時間的劣化を表現したものの如くである。のみならず、注（2）に挙例した謝朓「和伏武昌

登孫権故城」詩や呉筠「呉城賦」等は、いづれも古城を詠じたものであって、それぞれが基づいた「蕪城賦」の各句が、比較的近い時代においては、戦乱による破壊ではなくして、時間経過による荒廃の描写と解釈されていたことを示す有力な傍証である。

(20) 広陵は元嘉八年（四三一）に南兗州の治所となっている（『宋書』州郡志）。とすれば、「蕪城賦」後半の描写は鮑照の空想の産物なのか、という素直な疑問が生じる。その可能性を示す類例として、鮑照より後の作品ではあるが、庾信「哀江南賦」（倪璠注・許逸民校『庾子山集注』一九八〇年、中華書局。巻二）を挙げておく。同賦は「周は鄭に怒りを含み、楚は秦に冤（うら）みを結ぶ（周含鄭怒、楚結秦冤）」以下、江陵の滅亡と連行される捕虜の凄惨酸鼻な描写が展開される。しかし『北周書』に拠れば、庾信は江陵陥落以前に長安に抑留されており、実際には目睹していないようである。庾信の事績と「哀江南賦」については、倪璠「庾子山年譜」、小尾郊一「庾信の人と文学」（『広島大学文学部紀要』二十三号、一九六四年）、興膳宏『望郷詩人庾信』（一九八三年、集英社）、矢嶋美都子『庾信研究』（二〇〇〇年、明治書院）、加藤国安『越境する庾信―その軌跡と詩的表象』（二〇〇四年、研文出版。上下）等を参照。

(21) 六朝までの廃墟（都市）を描いた主要な文学作品には、以下のようなものがある。【先秦】箕子「麦秀」詩（『史記』宋微子世家）・「黍離」詩（『毛詩』王風）、【後漢】曹大家「東征賦」（『文選』巻九）、【魏】曹操「薤露行・惟漢二十二世」（『宋書』楽志）・王粲「従軍詩」五首 其五（『文選』巻二十七）・阮籍「詠懐詩」十七首 其十二（『文選』巻二十三）、【晋】陸機「門有車馬客行」（『文選』巻二十八）・潘岳「西征賦」（『文選』巻十）・劉琨「答盧諶詩并書」（『文選』巻二十五）、【宋】顔延之「北使洛」詩（『文選』巻二十五）・同「還至梁城作」詩（『文選』巻二十五）・鮑照「蕪城賦」（『文選』巻十一）、【斉】謝朓「和伏武昌登孫権故城」詩（『文選』巻三十）、【梁】呉均「呉城賦」（『藝文類聚』巻六十三 居処部 城）、【北朝】庾信「哀江南賦」（『庾子山集注』巻二）・顔之推「観我生賦」（『北斉書』顔之推伝）。魏以後の時代区分・配列は、興膳宏編『六朝詩人伝』（二〇〇〇年、大修館書店）を参照。

(22) 其後箕子朝周、過故殷虚、感宮室毀壊、生禾黍。箕子傷之、欲哭則不可、欲泣爲其近婦人、乃作麥秀之詩以歌詠之。其詩曰、「麥秀漸漸兮、禾黍油油。彼狡僮兮、不與我好兮」。所謂狡童者、紂也。殷民聞之、皆爲流涕。

(23) この詩は、勅命を受けた顔延之が、北伐中の劉裕を慰問に訪れた際の、洛陽宮殿跡での作とされる。

(24) 「天」を持ち出す発想は、すでに『詩経』王風「黍離」詩に対する『毛詩』の解釈に見られる。ただし、真に詩人がそうした意図をもって詠じたとは断言できない。事実、『韓詩』では孝子伯奇（讒言を信じた父の尹吉甫に殺された）を悼む詩（『太平御覧』巻四六九 人事部 憂下）、劉向『新序』節士篇では衛の宣公の太子伋が殺されたのを悼む詩と解釈する。

(25) 睹蒲城之丘墟兮、生荊棘之榛榛。惕覺寤而顧問兮、想子路之威神。衛人嘉其勇義兮、訖于今而稱云。蘧氏在城之東南兮、民亦尚其丘墳。唯令德爲不朽兮、身既沒而名存。惟經典之所美兮、貴道德與仁賢。

(26) 登高堞以詳覽、知吳濞之衰盛。戒東南之逆氣、成劉后之臧聖。藉鹽鐵之殷阜、臨淮楚之剽輕。盛几杖而弭心、怒抵局而遂爭。忿爰盎之扶禍、惜徒傷於家令。匪條侯之忠毅、將七國之陵正。褒漢藩之治民、並訪賢以招明。

(27) 『文選』を例にとれば、「《国名》＋都」…左思「蜀都賦」・「呉都賦」・「魏都賦」、「《方向名詞》＋都／京」…班固「西都賦」・「東都賦」・張衡「西京賦」・「東京賦」・「南都賦」。

(28) 「蕪」・「無」ともに「上平声 十 虞」（『広韻』）。馮虛公子・安処先生（張衡「西京賦」・「東京賦」）や子虛・烏有先生・亡是公（司馬相如「子虛賦」・「上林賦」）等、実在しないことを示す人名の例はある。あるいは、ここから着想を得たものか。

(29) 拙稿「鮑照の文学とその立場—行旅詩を中心に—」（『日本中国学会報』第五十六集、二〇〇四年）は、義慶文壇における鮑照の立場が、主体的に個人的心情を吐露することを極力抑え、主君に成り代わっての代作をはじめとする、職人的性格を持っていたことを論じたものである。本論文は、その姉妹篇である。

(30) 安田二郎「元嘉時代史への一つの試み—劉義康と劉劭の事件を手がかりに—」（『名古屋大学東洋史研究報告』二、一九七三年。のち『六朝政治史の研究』二〇〇三年、京都大学学術出版会。二三七～二七四頁）を参照。本論文は、氏の論考に多大な示唆を得た。

(31) 劉義恭は、義康の失敗に懲りて、淡々と文書事務をこなすだけとなり（『宋書』武三王・江夏文獻王義恭伝）、劉義季は、義康事件後、毎夜酒におぼれる日々であったという（『宋書』武三王・衡陽文王義季伝）。

(32) 漢の劉氏系図は『史記』・『漢書』、宋の劉氏系図は『宋書』に基づいて作成。帝諱は小竹武夫訳『漢書』Ⅰ（一九九七年、筑摩書房。橋川時夫「解説」、三六三～四三六頁）を参照。

(33) 前漢高祖の弟に当たる楚元王劉交の後裔とする（『宋書』武帝紀）。

(34) 時尚書令傅亮自以文義之美、一時莫及。延之負其才辭、不爲之下、亮甚疾焉。廬陵王義眞頗好辭義、待接甚厚、徐羨之等疑延之爲同異、意甚不悅。少帝即位、以爲正員郎、兼中書。尋徙員外常侍、出爲始安太守。領軍將軍謝晦謂延之曰「昔荀勗忌阮咸、斥爲始平郡。今卿又爲始安。可謂二始」。

(35) 脩之自州主簿遷司徒從事中郎。文帝謂曰「卿曾祖昔爲王導丞相中郎、卿今又爲王弘中郎。可謂不忝爾祖矣」。

(36) 初爲荊州、甚有自矜之色。將之鎭、詣從叔光祿大夫澹別。澹問晦年。晦答曰「三十五」。澹笑曰「昔荀中郎年二十七爲北府都督、卿比之、已爲老矣」。晦有愧色。

(37) 拙稿「『世説』の編纂と劉宋貴族社会」（『中国文学論集』第三十三号、二〇〇四年）では、『世説』に取り上げられた機知頓才の競争が、劉宋の貴族社交界の間でも愛好されていたことを論じた。こうした揶揄も、おそらくは彼らの機知を尊重する風潮から発生したものであろうが、『世説』の編纂から見ても明らかなように、劉義慶とその幕下文人集団は、このような社交界の動向に機敏に反応していたようである。

(38) 原文は「受任歴藩、無浮淫之過。唯晩節奉養沙門、頗致費損」。なお、『高僧伝』には、劉義慶が僧侶を厚遇した記事が四例あるが、うち南兗州刺史時代のことと判断できるものは次の諸例である。すなわち、「元嘉十八年夏受臨川康王請、於廣陵結居」（巻三 訳経 畺良耶舎伝）、「宋元嘉二十年、臨川康王義慶携往廣陵、終於彼矣」（巻十二 誦経 釈道冏伝）、「遇宋臨川王義慶鎭南兗、儒以事聞之。王賛成厥志、爲啓度出家」（巻十三 唱導 釈道儒伝）の三例である。

(39) 注（31）を参照。

(40) 原文は「長沙王道憐子義慶、在廣陵臥疾。食次、忽有白虹入室。就飲其粥。義慶擲器於階。遂作風雨聲、振於庭戸。良久不見」。なお、『太平広記』巻三百九十六 虹 所引『独異志』も同内容である。

(41) 義慶在廣陵、有疾、而白虹貫城、野麕入府。心甚惡之、固陳求還。太祖許解州、以本號還朝。

(42) 例えば、漢の昭帝の時、昌邑王劉賀が「宮室」に入ってきた熊を見るという故事がある（『漢書』五行志）。

この記事では、郎中令龔遂が「天の戒めである」と謎解きを行っているが、昌邑王は行いを改めずに国を失ったという。また、王充『論衡』には、後漢の楚王劉英の宮殿に鹿が侵入し、後に英が薨じたという記事がある（巻十六、遭虎篇）。昌邑王劉賀は、一度は帝位に就いたが、霍光に廃され領国を削られて薨じた。楚王劉英は、図讖事件の発覚によって廃され、後に自殺した。また、王族ではないが『宋書』五行志には、三国呉の丁奉の陣営に野豚が侵入した記事がある。丁奉は後に叛乱を起こし敗死するが、孫皓はその子を殺し、遺族を追放したという。

(43) 元嘉十七年、徙彭城王義康於豫章。義慶時爲江州。至鎮、相見而哭。爲帝所怪。徵還宅、大懼。

(44) 西土の耆老は、咸な怨思を懐き、上の睠顧を冀ひて、盛んに長安の旧制を称へ、洛邑を陋しむの議有り。故に臣は「両都賦」を作り、以て衆人の眩曜する所を極め、折くに今の法度を以てす（西土耆老、咸懐怨思、冀上之睠顧、而盛稱長安舊制、有陋雒邑之議。故臣作兩都賦、以極衆人之所眩曜、折以今之法度）。『文選』巻一。

(45) こうした宣伝活動は、元来、書簡文が重要な役割を果たした。金文京『三国志の世界』（二〇〇五年、講談社。一七八～一八九頁）を参照。また、書簡文と記室の文人の関わりについては斯波六郎「文筆考」（『支那学』小島・本田二博士還暦記念特別号、一九四二年。のち『六朝文学への思索』二〇〇四年、創文社。四二二～四八二頁）を参照。